

# 「ごめんなさい」

近頃、あまり聞かなくなつた言葉に、この『「ごめんなさい』があるように思えます。政治家や、社会的地位の有る方からは、『遺憾に思う』とか『申し訳ありません・謝罪いたしました』とかの言葉ばかりです。どうしてこの『ごめんなさい』が聞かれなくなつてしまつたのでしょうか。『ごめんなさい』と違つて『遺憾に思う』等は、口先ばかりのような気がいたしますね。銀行破綻で謝つたり、事故で会社の責任者が謝つたりするときにこの言葉がよく出てまいります。でもこれでは何で謝つているのかサッパリわかりませんね。会社が謝つているのか、社長が謝つているのか、何に対しても謝つっているのかボンヤリとして何か何だかわかりません。これは『責任』の問題と密接につながつてゐるようです。ある人が『日本人の罪の意識は【世間の皆様おさわがせ罪】だけだ』と言われましたが、そんな感覚での謝り方のようです。

確かに、『世間の皆様に御迷惑をかけた』とか、ばかりで本当に自分が悪いという感覚は希薄のようであります。戦後の欧米的な感覚も、このことに拍車をかけているようです。先に謝つた方が負けという社会です。つまり謝つたら責任問題、そして賠償問題まで発展いたします。訴訟社会的な要素が日本でも始まると言われていますが、謝る事で争いが不利になる事でも考えていなければならぬ社会がやつてくるのでしょうか。他人の足を踏んでも『お前の足がそこにあるからだ』とも言つてゐるようです。先に謝つたら負けの風潮はゾッとしますね。

それほど今はえらそうな正しそうな人が多いのでしょうか。あやまれないのはどつかに自分は『間違つてはいけない、『みんなもやつてゐるから』とかの意識があるからなのでしょう。

淨土三部経の一つ『仏説阿弥陀経』の特徴は無問自説の經と呼びています。お経は普通、お釈迦さまがだれかの質問に答えられる形式で始まりますが、『阿弥陀経』は問わず語りに、釈尊自ら説法を始められてゐるからなのです。このお経の中で三十六回も名前を呼ばれた方がおられます。お弟子の中で智慧第一と呼ばれた『舍利弗』です。なぜ智慧がある舍利弗はそれほどまで名指しされ説法をうけたのでしょうか。維摩経の中に、この舍利弗に対して『舍利弗よ、あなたは智慧第一であるという意識が頭にこびりついてる』と書かれています。それほどまでにこの舍利弗はえらい人だつたのでしょう。又そのえらさ故におごり、執着をしていましたのでしょう。だからこそ先の阿弥陀経の中でお釈迦さまは三十六偏も『舍利弗よ、舍利弗よ』と呼びかけられたのでしよう。このえらさを打ち砕かれたところに仏法の救いがあります。それほどまでにこの阿弥陀経のような氣もいたします。人間の知性、理性の限界を知ることが仏教入門の出発点なのです。知性とかに振り回されていたら決して『ごめんなさい』は出てこないでしきうね。仏教を聞くのは学問的にえらくなつたりする事ではないのです。そのような傲慢なことではなく逆に愚かな我が身を知らされる事にあるのです。

社会的に名誉も富も兼ね備えた人よりも、無知貧乏であつても念仏申される方の尊さを思ひます。自分を厳しく見つめ、自らの心をよく知つてゐる人こそが仏法では尊い方なのです。

「おろかなる身こそなかなかうれしけれ 弥陀のちかいにあふとおもへば」(良寛)『ごめんなさい』と素直にあやまれる『私』になりたいものですね。